

私にとつて書くということは、どういうことなのだろうか。昨今では、一日の殆どをパソコンの前で過ごす。ニュースの検索、興味あるテーマを追ってのネットサーフィン、それにゲームや占い。が、最も多くの時間を割くのは『書くこと』。特に、その対象の多くはホームページ（HP）だ。

二〇〇三年、会社を引退するのを機に自分のHPを始めた。キツカケとなったのは、妻の病気だった。私が会社を辞める少し前に、二度目の脳出血で倒れた妻のことを親戚や友人、知人の皆さんがとても心配してくれた。その方たちに病状を報告するのは私の義務ではないか、と判断した。とはいえ、全員に手紙や電話で近況を告げるのはとても無理だ。当時、爆発的に普及し始めていたパソコンに頼ることにした。

HPに『介護日記』というページを設け、病院での妻の様子を詳細に伝えることにした。直ぐに反響があった。姉さん思いだった神戸在住の妻の末弟からメールが届いた。

「姉のことがとても心配で、お義兄さんに電話するのも迷惑だろうと悩んでいました。介護日記で姉の様子がよくわかります。傍に居るようです」とあった。

こうした反響に意を強くして『介護日記』の充実を図るとともに他のページも意欲的に開設していった。

寝たきりだった妻は十一年前に他界したが、『介護日記』は『介護日記―その後』と装いも新たに、毎日のブログとして継続している。また、個人のHP以外に、高校や大学の同窓会、更には会社のOB会や異業種交流会などのHPにまで手を広げてしまい、私の生活は今や書くことを抜きには語れない。

振りかえれば、書くことに対する私の執着は、一九七六年、海外駐在に出た時に始まったと記憶する。本社へのレポートを『駐在員便り』と題した月報の形で書きはじめた。

海外駐在員は本社のお偉方と日頃のコミュニケーションがない。駐在員の評価は、多分に現地からのレポートによるところが大きい。つまり、レポートの出来・不出来で評価が決まるのだ。

ワープロもファクシミリもなかった時代だ。一度下書きをした原稿に目を通し、推敲を加えた後、レポート用紙に黒のボールペンで清書していく。書き間違えると、白の修正液で一旦消して、その上に正しい文章を書くという面倒な作業であった。完成した駐在員便りを何度も読み返し、必要部数のコピーを取る。本社の関係部所に送る時は、まるで懸賞小説に応募するような気分で郵便局に持参したものだ。

中東、西欧、北米と都合十二年の駐在員生活を経験する中で、『書く』という
コミュニケーション手段の重要性が知らず知らずのうちに、身についていった。
(以下次号に続く)

(なかむら・りゆうすけ 日本エッセイスト・クラブ会員 下丸子在住)